フィルムツーリズムと地域との関わりに関する研究

山本園子[1]・岡本直久[2]・石田東生[2]

[1]学生会員　筑波大学　システム情報工学研究科（〒305-0005 茨城県つくば市天王台1-1-1）
E-mail: s11120553@sk.tsukuba.ac.jp

[2]正会員　筑波大学　システム情報工学研究科社会システム・マネジメント専攻（〒305-0005 茨城県つくば市天王台1-1-1）

本研究では、ロケ地を利用した観光として近年注目されているフィルムツーリズムにおいて、映画の製作、支援過程に着目し、その過程における地域の取り組み、またそれによってもたらされる映画支援関係者の意識変化を検証するものである。それによって映画を契機とした地域の観光への関わり方について、どのような形態があるのかを検証し、持続可能な地域の活性化への在り方を探ることを目的としている。

Key Words: *Film tourism, Film Location, Sightseeing, Region, Filmmaking*

1.研究の背景と目的

近年、農山漁村での体験型観光が出来るグリーンツーリズムやエコツーリズムなど観光ニーズの多様化や個性化が図られている。その中で、ロケ地の観光による経済効果が望めることからフィルムツーリズムが注目されている。

本研究では、フィルムツーリズムを、

映画やドラマなどで使われたロケ地、原作地を訪れる旅行行為とそれらを取り巻く主体、取り組み全て

を含むものとする。

フィルムツーリズムのメリットとして主に

①　直接的経済効果： 　撮影隊の宿泊費、食事代、交通費、備品購入等 ②　間接的経済効果： 　ロケ地の宣伝広告効果による観光客誘致 ③　地域における新たなネットワークの形成 ④　外部からの情報発信源 ⑤　地域資源の再認識 ⑥　地域の知名度・イメージアップ

が挙げられる[1)]。本研究では、③地域における新たなネットワークの形成、⑤フィルムツーリズムを通した地域内における地域資源の再確認に着目していく。

これまで既存研究[2)]においてテレビ番組や映画が地域にとって、地域資源を見直すきっかけや特徴付ける要素になると同時に地域の情報発信ツールとしての役割をもっていることがわかっている。また、地域においてフィルムツーリズムは例え永続的な観光とならなくても、まちを歩くうちに新しい見所を感じ、それが再びその地域に足を運ぶ原動力になるのではないかと考えられている[3)]。

一方で、フィルムツーリズムだけで観光客を集客するのは現状として困難であるという課題も挙げられる。次々と新しい映画が公開されるため１つの作品が長く影響しないからである。その限定的な期間の中で、フィルムツーリズムを通して地域外部の人にロケ地となったその地域を知ってもらい、興味をもってもらうきっかけとなる取り組みを考えていく必要性がある。また地域内においてもフィルムツーリズムが新しい地域のつながりが生まれるきっかけになるではないかと考えられる。地域が観光客や地域内でうまれたきっかけを利用して、フィルムツーリズムから今後の観光にどうつなげていくのかがフィルムツーリズムをきっかけとした観光形態を築く上で課題となってくると考えられる。

フィルムツーリズムによるロケ地への訪問者数の影響については以下の一過型、ベースアップ型、無関係型の３つの形態があげられる。

<u>一過型</u>

放映が決定した放映前年ごろから来訪者が増加し、放映年をピークにその数は減少し、再び放映開始前の水準に戻ってしまう

<u>ベースアップ型</u>

放映年ごろから来訪者が増加するが、放映年にはピ

ークに達し、それ以降も減少するものの放映前より高い水準に収束する

<u>無関係型</u>
来訪者の数にそれほど変化はなく、ドラマの放映が舞台となった場所への来訪者に大きな影響を与えたとは考えられない

この中でフィルムツーリズムをきっかけに地域が向上しているといえるのは、ベースアップ型である。

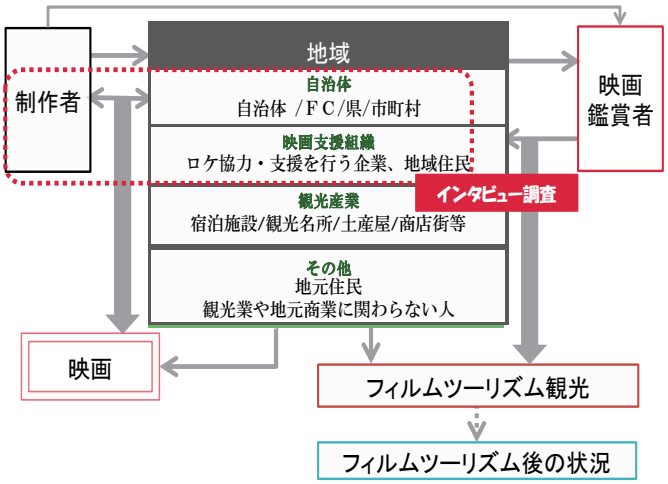
先に述したように、これまで映画・テレビ番組による地域への影響について既存研究[2) 3)]で示されていたものの、映画公開後の長期的な視野からの地域の取り組みが検証されていない。

そこで、本研究の目的として映画の製作、支援過程に着目し、その過程における地域の取り組み、またそれによってもたらされる映画支援関係者の意識変化を検証する。それによって映画を契機とした地域の観光への関わり方にはどのような形態があるのかを検証し、持続可能な活性化への在り方を探る。

2. 研究の方法

本研究では、インタビュー調査を通して映画製作、支援過程でのフィルムツーリズムのあり方を探っていくものとする。

フィルムツーリズムにおける主体間の関係(図-1)は製作者、地域、映画鑑賞者側に焦点をあてて作成している。製作者側と地域側においてはその地域が映画ロケ地として選定されると地域に対する製作側による直接経済効果が生まれる。映画公開前後も地域や製作側の宣伝、もしくは映画を鑑賞した映画鑑賞者がそのロケ地に興味を持ち、その地域を訪れるきっかけとなり、映画による間接的経済効果が生まれると考えられる。また、地域側の自治体や映画支援組織は映画づくりにおいて製作者に協力するともにそれぞれ映画に対して何らかの期待する効果・不安があると考えられる。先に述べたようにフィルムツーリズムは一過性であるという課題があり、数年後の観光についても持続的な観光の面で検討する必要がある。



図－1 フィルムツーリズムにおける主体間の関係

本研究では、目的を検証するために映画「桜田門外ノ変」と映画「RAILWAYS」の2つの映画を対象とする。映画「桜田門外ノ変」は、初の全国放映規模の地域発案型映画であり、映画の製作、支援過程において地域が深く関わっている。また、映画「RAILWAYS」は、舞台となった島根県出雲市出身の監督が一畑電車の廃止論が唱えられた 10 年前からこの映画の構想を抱いていた。監督は、これまでに映画「白い船」等を初めとして島根三部作と呼ばれるように、地元島根県を舞台とした映画を数多く撮ってきている。そのため地元に対する愛着も強く、より地域の魅力を描いた映画になっている。これらの観点から本研究の対象とした。

映画「桜田門外ノ変」：

水戸藩開藩 400 年記念、桜田門外ノ変から 150 周年を記念してつくられた映画であり、「桜田門外ノ変」映画化支援の会（以下、支援の会）という地域組織を中心に映画づくりと連携した地域の取り組みを展開している。支援の会の目的として、地域発案型の映画づくりを起爆剤に県北地域を元気にすることを掲げ、映画づくりから始まる地域づくりを目指し、映画の持つ求心力と波及効果を最大限に利用して地域を、水戸藩を、茨城を元気にしようと活動を行っている。また、支援の会のキーワードとして「郷土愛」が挙げられ、継続して活動していくことで、県に誇りと愛情を感じてほしいという支援の会設立者らの思いが込められている。また、映画の中心施設として、水戸市千波湖にて、映画の最大の山場となる桜田門外での襲撃現場と、背景となる江戸城の桜田門外周辺を細かく再現した、邦画史上最大規模のロケセットが平成 22 年 4 月下旬～平成 24 年 3 月下旬まで一般開放されている。

表 1　インタビュー調査対象者

	桜田門外ノ変	RAILWAYS
行政	・茨城県フィルムコミッション推進課 ・観光物産課	・出雲市長 ・出雲市市議会議員 ・出雲市観光交流推進課
製作者	・「桜田門外ノ変」映画化支援の会設立者	・制作プロデューサー ・監督
映画支援組織	・「桜田門外ノ変」映画化支援の会 ・オープンセット建設者	・一畑電車株式会社

映画「RAILWAYS」　：
地元を舞台とした映画を数多く撮影されている監督が 10 年前から地元島根県出雲市の一畑電車をテーマに構想を抱き、映画化したものである。出雲市を舞台に 50 目前の男性が幼いころの夢を追い求め始める、監督オリジナルの映画であり、２０１０年に引退したデハニ５０形を特別に許可を得て撮影に臨んでいる。

この両者の映画において、映画支援関係者へのインタビュー調査の情報から、本研究では、以下の点を整理する。

① 映画づくりに対する地域の姿勢の共通点と相違点の抽出
② 映画による映画支援者や地域住民の意識変化

各映画でのインタビュー調査については図-１に記載している視点を対象に行うものとする。インタビュー調査は表１に示している方を対象に行った。

3. 映画「桜田門外ノ変」における各主体の関係

映画「桜田門外ノ変」は平成１８年に有志で集まって話し合いをした際に茨城県で撮られた映画「HAZAN」を通した映画の取り組みについて知り、映画「HAZAN」ではあまり映画支援の仕組みづくりが確立していなかったが、それでも映画の求心力が高いこと、また波及効果がケタ違いであることから水戸をテーマにした映画づくりに対して考えるようになったのがきっかけである。この映画は支援の会が映画の支援の中心となり、そこに行政などがバックアップした形態で映画支援が行われていた。

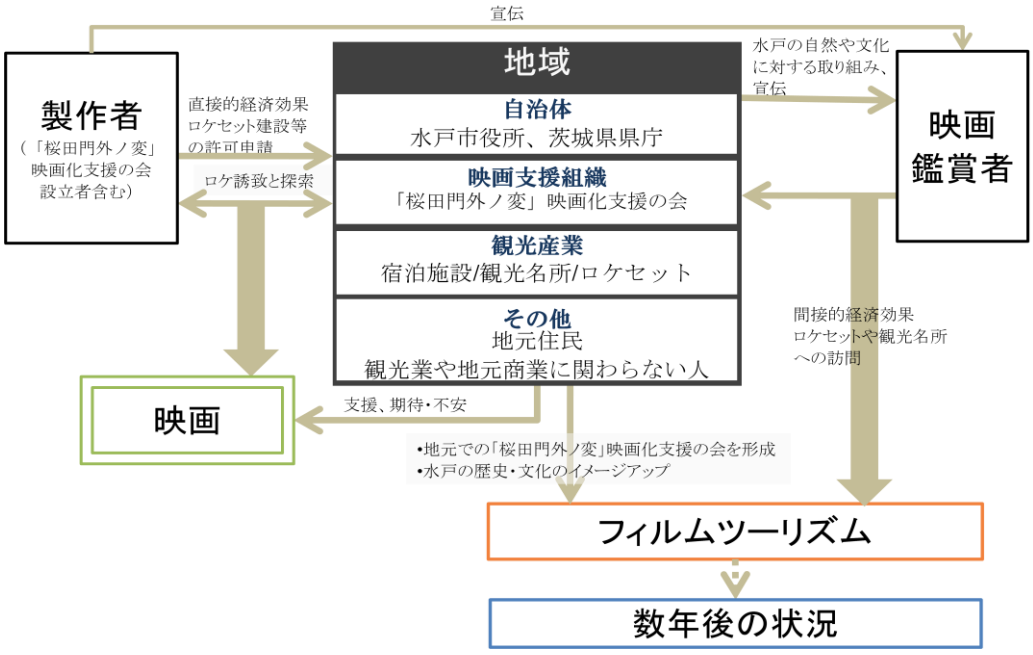
(1)行政

いばらきＦＣでは主に映画でのロケ地を探して候補を提供しているが、今回の映画では支援の会が主となってロケ地関連の仕事を請け負っていたので、いばらきＦＣでは支援の会のバックアップとして動いた。時期としては、オープンロケセットの建設段階から観光物産課が参加し、撮影の始まっている１月からいばらきＦＣが映画支援に本格的に動き出す形となった。支援内容としては、主にロケ地の情報提供や許可の確認をはじめとして、支援の会に説明の場や PR コーナーを提供したりした。支援の会のロケ地交渉の際に行政が中間に入ることで、ロケ地提供側との交渉がよりスムーズになった。また、行政へのヒアリングから映画の効果として、地域全体としても、民間が中心となった地域の映画ということで映画鑑賞者が多く、特に水戸市、ひたちなか市といった旧水戸藩であった県北地域において反響が大きかったことが分かった。

(2)製作者

支援の会の設立に直接携わった方は映画支援参加のきっかけとして、地域への貢献に対する意欲がとても高く、映画づくりによるまちづくりから地域資源の再認識や郷土愛を養おうと今回の映画づくりを提案し、地域全体へと展開した。映画製作時の課題としては、映画製作にあたり資金調達などを初めとした地域内での映画への協力の呼びかけやＰＲ等広報が挙げられた。

支援の会は、「いばらき映像文化振興会」も支援



図－2　映画「桜田門外ノ変」における主体間の関係

の会と並行して設立しており、以後民間での映画づくりに関連した組織として活動する可能性を示しており、茨城、水戸においての映画を用いた発展に対する期待を寄せている意見が多く見受けられた。映画製作に直接携わった支援の会の方は、今まであまりまちづくりや水戸の歴史に興味を示すことが少なかったが映画を通して自分たちの住むまちに対する意識の向上がみられた。

(3)映画支援組織

支援の会への参加動機として主に映画や撮影エキストラへの興味や知人からの誘いが挙げられている。元々映画好きだった人やエキストラに興味があり、エキストラ登録をしたものの女の人の役が少なく、ボランティアや契約社員として支援の会に参加したスタッフなど映画への興味を通しての参加が多く見受けられた。また、知人から誘われ、映画の裏側での運営や地域を挙げての取り組みに対して参加することへのやりがいから参加する方もいた。このように地域づくりに興味を持って参加した方は実際にはあまり見受けられず、いずれも映画による効果や知人からの勧誘をきっかけに参加する方が多かった。

一方、オープンロケセットの建設に携わったインタビューイは映画支援参加のきっかけとして地域への貢献に対する意欲がとても高いことがわかった。

映画支援時の課題として、支援の会の活動内容は初めてのことも多く、地域や幕末に関する歴史の知識の吸収や仕事への適応といった面での課題が見られた。

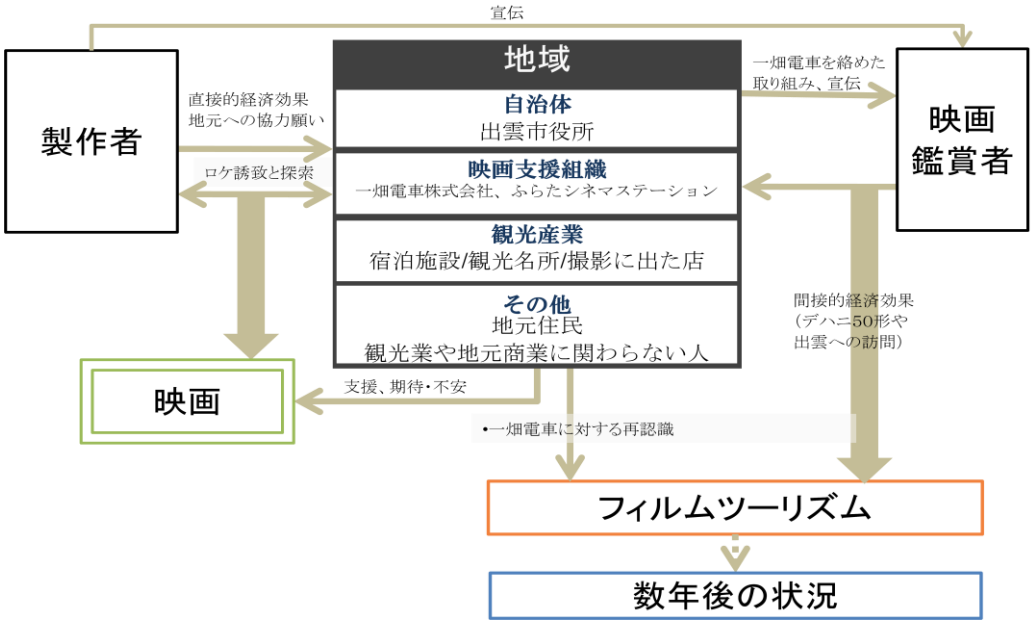
オープンロケセットの建設において映画ロケ地として公共の土地に建てる等、行政との許可の申請など条例や行政との交渉に対する課題があったことが挙げられている。オープンロケセット自体にも限られた予算の中で映画のロケ地としての最大限の理想を形にするための製作側と建設側での話し合い、また建設側はほとんどボランティアで行っていたため、仕事との両立という点で課題がみられた。他にもボランティアと普段の仕事を映画づくりのために両立している方が地域組織で多くみられた。

ボランティアした方々の多くは、映画の題材ともなった水戸藩の歴史や幕末の歴史の再認識や地域に対する愛着、自身、誇りの醸成などに対する意識変化がもたらされている。

支援の会にボランティアやバイトで働いている方はオープンロケセット一般開放期間での契約となっているため期間限定の活動となっているが、それでも地域での取り組みに対して関心を示しており、今後の積極的な参加に対する意思を示されていた。

4.映画「RAILWAYS」における各主体の関係

映画「RAILWAYS」は一畑電車の廃止論が大勢を占めていた１０年前に監督が構想を抱き始め、交通弱者の生活形態に沿うように努力や工夫しないのは多くの人が物質的な豊かさのみを追っているからではないかと考え、本当に価値あるものは何かを問いかけられるような映画を作りたいと思ったのがきっかけである。出雲市でも監督が撮る地元の映画をはじめとする映画祭を定期的にひらくなど映画に対する



図－3　映画「RAILWAYS」における主体間の関係

関心が高い。監督は映画「RAILWAYS」の前にも地元を舞台とした映画を撮っており、その過程ですでに映画支援組織や行政との交流や信頼関係を築かれていた。

(1)行政

映画「RAILWAYS」の監督とは、今回の映画「RAILWAYS」におけるインタビューイのほとんどが監督の前映画「白い船」で知りあうなど、映画「RAILWAYS」以前からの付き合いがあることがわかった。監督自身、島根を舞台にした映画を過去にも数多く撮られていることから地元での映画支援に対する信頼関係がすでに存在していた。実情で赤字経営である一畑電車を題材にした映画に対する資金援助に関して一部の地元住民からの反対などの懸念を抱えていながらも支援した。また、出雲市観光物産課など映画撮影に直接携わった方々は、撮影時の許可申請や民家などのロケ地を探すことなど映画撮影場所をセッティングするまでの課題が多くみられた。

(2)製作者

製作側は、映画を制作するうえで地方の反対派への交渉や地元での映画撮影に対する市の指揮をあげることが課題となった。

また映画による効果に関して、映画を鑑賞した地域や鑑賞者のみならず、映画づくりに関わったスタッフ、俳優にも撮影時に島根の良さを感じるなど撮影隊にも効果がみられた。また、島根を魅力に感じた俳優の方がテレビで島根をＰＲしたことで島根の宣伝にもつながった。

映画は観光につながる要素も十分に持っているが、映画の効果に頼り切った観光形態ではなく、それをきっかけとした取り組みを映画づくりの段階から取り組んでいく必要がある。

(3)映画支援組織

一畑電車株式会社で直接映画撮影に携わった方は撮影時に引退したデハニ５０形を線路上で走らせるという許可がなかなか取れないなど課題が多くみられた。映画「RAILWAYS」の公開は、地元住民が田園風景や一畑電車などを初めとした自分たちの地元にあるものを見つめなおすきっかけとなった。モデルとなったデハニ 50 形に関しても「バタデン」という言葉が映画を契機に地域に浸透するなど、地域の人がより一畑電車を身近に感じ、価値あるものとして認識し始めるようになった。そして、引退したデハニ 50 形の保存活動などの動きが地域で出始めた等、電車に対する地域の意識が変わってきている。また、地域の人たちだけでなく、今回映画の題材として取り上げられたバタデンの会社である一畑電車株式会社で働く社員にも一畑電車に対してより愛着や誇りを感じる等、士気の向上がみられた。

5. 考察

(1)映画という行政と地域を巻き込んだ取り組み

映画という行政を巻き込んだ取り組みとして映画桜田門外ノ変では、IBARAKI ＦＣや支援の会、地域のエキストラなど、また映画 RAILWAYS では観光交流推進課、地域住民のエキストラといったように双方の映画とも行政や地域との協力体制の下映画づくりが行われているのが分かる。

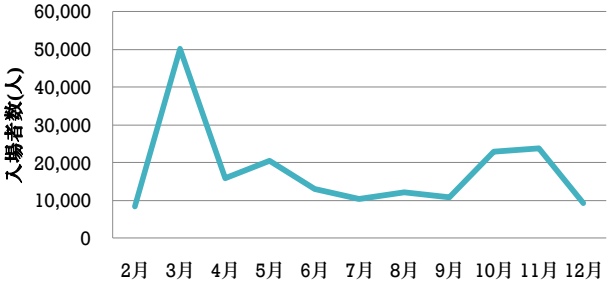
行政が映画に参加することで製作側の発言力が増す、またロケ地交渉などがスムーズにいくなど映画づくりにおける効率化をはかることができ、地域でもエキストラや炊き出し等の協力は映画製作において必要不可欠である。行政と地域が映画づくりに協力することで、官民一体となって映画を宣伝することができ、映画づくりをきっかけとして地域と行政の一体感が醸成される可能性が挙げられる。

(2)映画づくりにおける地域の積極的行動の重要性

行政におけるロケ誘致組織として地域での映画づくりにおいてフィルムコミッションの存在は大きいように感じるが、映画「桜田門外ノ変」では、地域組織である映画化支援の会が中心となって動き、ＦＣはそのサポートとして動いている。また RAILWAYS でも出雲市ＦＣはないが地域の率先的な協力のもと映画を製作いる。このように映画づくり、および支援にはＦＣの有無に関わらず、地域の映画を支援したいという意思で地域が動くことが大事である。また、二つの映画から FC 自体の機能も民間で補うことが可能であることがわかるのではないかといえる。

(3)中心施設による地域の愛着の醸成

映画「桜田門外ノ変」の中心施設となったオープンロケセットでは、映画公開の １０月を境に入場者の増加がみられ、オープンロケセットの来場者も１９万人を突破するなど映画の効果がみられることが分かる。なお、３月に入場者数に対する増加がみられるのは水戸市の偕楽園における梅祭りの影響であると考えられる。



図－4　オープンロケセット入場者数の推移

映画「RAILWAYS」で舞台となった一畑電車でも定期外輸送人員が映画公開を機に前年度と比べて約10%増加し、ロケ地ガイドやデハニ５０形の特別展示も予想を上回る参加者が参加したため開催を延長するなど好評ぶりを見せている。

映画「桜田門外ノ変」も「RAILWAYS」も映画での中心的役割を担ったオープンロケセットや一畑電車がある。それを中心に取り組みが多く展開されており、観光客が多く訪れている。映画の撮影において中心施設を設けることはフィルムツーリズムでは重要であり、また地域にとっても映画によって愛着や親近感を抱くきっかけとなる。

(4) 映画支援関係者や地域の意識変化

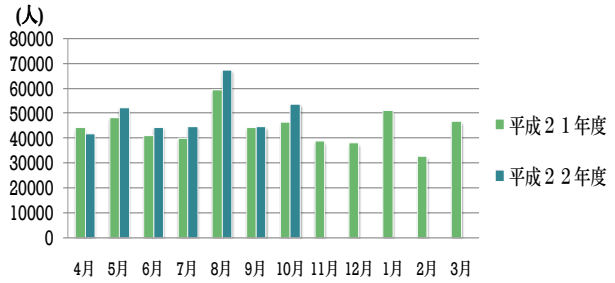
双方の映画とも映画を通して地域により愛着を感じたり、歴史や文化について考え直すなど、映画支援者や地域の人に意識変化がみられた。このことから映画を通して地域に観光客が訪れるだけでなく、地域も映画づくりへ参加や協力すること、また映画をみることで地元の魅力を再認識するきっかけとなることが分かる。

観光としてフィルムツーリズム取り組むのも大切であるが、それと同時に地域住民の郷土への愛着、資源の再認識を促すことも大切であると考えられる。

6.まとめ

双方の映画とも映画での中心施設を中心とした取り組みを展開しており、また行政と製作側が連携して映画づくりやその支援に望んでいることがわかる。一方で、映画「桜田門外ノ変」ではロケ地として観光名所も多く取り上げているのに対し、映画「RAILWAYS」は観光名所を写さず、田園風景等日常的にみられる風景を撮っているという違いがみられた。どちらがよりフィルムツーリズムとしてよいかは今回の検証ではわからなかったが、ロケ地として映っていた場所での訪問者増加につながるとは必ずしも言えない。

考察の（４）でも示しているように、双方の映画において映画支援関係者に地域資源の再認識や愛着の向上などの意識変化がみられ、映画によってまちづくりや自分たちの地域を改めて見直すきっかけとなっている。



図－5　一畑電車における定期外輸送人員の推移

7.今後の課題

(1)全国の映画づくりにおける調査

本研究では､映画｢桜田門外ノ変｣と映画｢RAILWAYS｣２つの映画の比較によって考察を行っており、それが必ずしも他の映画にあてはまるとは考えられない。「桜田門外ノ変」は初の全国規模の地域発案型映画であり、また映画「RAILWAYS」は島根で数多くの作品を撮られている地元出身の監督の作品であり、２つの作品とも特徴的である。しかし、そのほかの特徴を持った映画との比較研究を行っていくことで全国的な傾向を見ることが必要である。

(2)映画鑑賞者の視点からみたフィルムツーリズムのきっかけとなる要因の検証

今回のアンケート調査では、あまり映画鑑賞者、またフィルムツーリズムに訪れた観光客の視点を捉えきることが出来ず、また、本研究では、映画づくりにおける映画支援関係者の意識変化に重点を置いて研究を行っていた。そのため、映画鑑賞者やフィルムツーリズムを行う方からの視点での検証が不十分であり、映画鑑賞者のフィルムツーリズムに至るまでの影響要因について検証できなかった。

(3)映画公開から数年後のフィルムツーリズムの在り方の検証

本研究では、映画支援過程に着目して調査を進めており、映画公開後から数年たったフィルムツーリズムの効果も検証する必要性があると考えられる。本研究で、映画支援時の地域の在り方を把握し、今後映画公開数年後に視点を当てることでフィルムツーリズムをきっかけとした持続的な観光地への発展の特色を把握することが出来ると考えられる。

【参考文献】

(1)中谷哲也『フィルムツーリズムに関する一考察:「観光地イメージ」の構築と観光経験をめぐって』第 18 巻 第 1・2 号併合（2007 年 10 月 10 日）奈良県立大学「研究季報」

(2)　橋本幸(2006)「観光資源としてのロケ地-邦画『8 月のクリスマス』ロケ地、富山県高岡市を事例に-」富山大学卒業論文

(3) 田原潤一、後藤春彦、山崎義人 『農村文化の情報発信におけるモデルの利用に関する研究』No.41-3（2006 年 10 月）（社）日本都市計画学会「都市計画論文集」

(4) 水戸藩開藩四百年記念「桜田門外ノ変」支援の会 http://mitoppo.jp/

(5)　桜田門外ノ変 http://ginsaku.info/sakuradamongainohen/

(6) RAILWAYS　http://www.railways-movie.jp/

（2011.8.？ 受付）

RESEARCH ABOUT THE RELATION BETWEEN FILM TOURISM AND THE REGION

Sonoko YAMAMOTO, Naohisa OKAMOTO and Haruo ISHIDA

This research verifies how the region should take action for film tourism, which is a tourism that takes notice recently utilizing the film location as a sightseeing means, during the film making and support process and how this affects the film supporter's change in consciousness against their region. By this result, our purpose is to investigate the way of long lasting region activation by verifying how the region should involve with the sightseeing that started from film tourism.